

本願一乗

ノート

2020.02.18 本願寺名田庵別院 旭照寺オンライン
2020.03.03 安芸最禅寺雪安居

山上正尊案

(おつとめ) 1

(過去の判決) 平成12年度 本願一乗 判決 2

会読案【題意】

【出拠】

類文 4

【釈名】

本願 6

一乗 7

【義相】

一乗の釈 (体) 9

対弁 13

引文 『涅槃經』『華嚴經』く引証ではないく 浄土で実現する利益 21

海の釈 (徳) 24

二教二機対 28

(参考)

昭和54年度 聖道権実 判決 29

平成8年度 聖道権実 判決 30

ご案内 拙論「絶対釈の考察」 33

如來興世之正說奇特最勝之妙典
一乘究竟之秘說速疾圓融之金言
十方稱讚之誠言時機純熟之寶教

○无^ム尋^{ソム}光^{クワウ}ノ利^リ益^{ギク}ヨリ

威^イ德^{トク}廣^{クワウ}大^{ダイ}ノ信^{シン}ヲエテ

カナラズ煩^{マン}惱^{ノウ}ノコホリトケ

スナハチ菩^ボ提^{テイ}ノミツトナル

罪^{ズイ}鄣^{ショウ}功^{コウ}德^{トク}ノ體^{タイ}トナル

コホリトミツノゴトクニテ

コホリオホキニミツオホシ

サハリオホキニ德^{トク}オホシ
スミヤカニトクサトラシム

名^{ミヤウ}號^{カウ}不^フ思^シ議^ギノ海^{カイ}水^{スイ}ハ

逆^{ギャク}謗^{バウ}ノ屍^シ骸^{ガイ}モトミラス

衆^{シュ}惡^{アク}ノ萬^{マン}川^{セン}歸^キシヌシバ

功^{コウ}德^{トク}ノウシホニ味^ミナリ

盡^{シン}十^{ジュウ}方^{ホウ}无^ム尋^{ソム}光^{クワウ}ノ

大^{ダイ}悲^ヒ大^{ダイ}願^{ガン}ノ海^{カイ}水^{スイ}ニ

煩^{マン}惱^{ノウ}ノ衆^{シュ}流^{リウ}歸^キシヌシバ

智^チ慧^ヱノウシホニ味^ミナリ

本^{ホン}願^{ガン}圓^{エン}頓^{トン}一^{イチ}乘^{ショウ}ハ

逆^{ギャク}惡^{アク}攝^{セツ}スト信^{シン}知^チシテ

煩^{マン}惱^{ノウ}菩^ボ提^{テイ}體^{タイ}无^ムニト

スミヤカニトクサトラシム

願^{ガン}以^ニ此^{コノ}功^{コウ}德^{トク}

平^{ヘイ}等^{トウ}施^セ一^{イチ}切^{セツ}

同^{ドウ}發^{ハツ}菩^ボ提^{テイ}心^{シン}

往^{ワウ}生^{ショウ}安^{アン}樂^{ラク}國^{コク}

【題意】

成仏の法は本願一乗のみであって、聖道門及び浄土門内の要門・真門を権仮方便として、本願の一法のみが真実の法門であることを明らかにする。

【出拠】

『行文類』一乗海釈、『愚禿鈔』、『一念多念文意』

文は省略する。

【釈名】

「本願」とは、第十八願のことである。「一乗」の「一」とは、唯一無二の意である。「乗」とは、運載の意で衆生を大菩提に運載する意味である。つまり、「本願一乗」とは、第十八願法、すなわち弘願法のみが衆生を大菩提に運載する唯一無二の法であるという意味である。

【義相】

（一） 一乗の義を明かす

①所至の究竟

一乗法とは、究竟の仏果を所至とするものでなくてはならない。何故なら、究竟を所至としない乗は、究竟に至るためには、他の乗を必要とし、これでは一乗といえないからである。弘願法の所至は、「証文類」に「利他円満の妙位、無上涅槃の極果」と示され、それは第十一願所誓の滅度である。宗祖は滅度の転釈の中、「無為法身」を出されるが、これが一乗海釈中の「究竟法身」に他ならない。これはまた、『唯信鈔文意』に、「法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり」と釈される、いわゆる法性法身である。宗祖は、滅度の転釈を「一如」で結ばれ、「しかれば、弥陀如来は如より来生して」と、主伴同証すなわち衆生の所証と弥陀の所証とが一つであることを示される。そして、「行文類」引用の『往生礼讃』に、「諸仏の所証は平等にしてこれこと説示されるように、究竟の仏果は、一切の仏において平等であり、一である。これが、一乗海釈の「異の如来ましまさず、異の法身ましまさず」と釈される意である。

なお、一乗とは大乘であると示されるが、大乘に対する小乗とは声聞乗・縁覚乗の二乗を意味し、その所至は阿羅漢・辟支仏であり、究竟の仏果ではないからである。その大乘とは、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗・仏乗の四乗の中の仏乗のことである。

後に二乗・三乗と出されるが、聖道法を菩薩乗として二乗に加え、三乗とする。二乗の所至が究竟の仏果でないのは当然であるが、極重の悪人にとっては、聖道法によっては究竟の仏果に至ることはできず、結局、一切衆生を善悪賢愚の隔てなく運載し、真実報土に往生せしめ、究竟の仏果を得せしめるのは弘願法のみであり、これを誓願一仏乗という。すなわち、

大乘は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。

と釈される意なのである。

②本願の力用

一乗法は、一切の機を運載するものでなければならない。何故なら、その法によって運載されない機が存在すれば、その機のために他の乗を必要とするからである。弘願法の所被の機は、偈前の文に、

「その機はすなはち一切善惡大小凡愚なり」と示される。海の釈に「凡聖所修の雜修雜善の川水を転じ、逆謗闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水となる」、「願海は二乗雜善の中下の屍骸を宿さず。いかにいはんや人天の虚仮邪偽の善業、雜毒雜心の屍骸を宿さんや」と、本願一乘海は、凡夫・聖者、逆謗闡提の雜善・無明を転ずるといわれ、それゆえ、そこには二乗の雜善、人天の虚仮邪偽の善業、雜毒雜心の自力行・自力心の存在が許されないと説かれるのは、一切の機を運載する法であることを示しているのである。

(二) 念仏と諸善との比較

一乘海釈では、『大經』所詮の教法である第十八願法を念仏であらわし、八万四千の法門を『觀經』顯説の要門法に摂めて諸善であらわし、念仏と諸善とが比較対論されている。また、弘願法に運載される他力の機と、要門法によって成仏道を歩む自力の機とが比較対論されている。

すなわち、教について念仏と諸善、機について自力の機と他力の機とを比較対論することによって、誓願一仏乗があらゆる法門に超え勝れた唯一無二の法であることが明らかにされているのである。なお、教について「絶対不二の教」といわれるが、これは、相對を絶した絶対ではなく、他の教法から抜きん出て、比肩するものがないほど勝れた唯一の教法であるとの意である。機について「絶対不二」がいわれるのも同じ意趣である。

会読案【題意】

仏教の真偽を知ることによって、善惡を問わない広大な仏道があることを確認し、一切の衆生を成仏せしめる仏道は本願の一法であることを明らかにする。

【出拠】

「行文類」一乘海釈

(『聖典全書』一巻54頁) (『註釈版』195頁)

【84】 「一乘海」といふは、「一乗」は大乗なり。大乗は仏乗なり。一乗を得るは阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなはちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなはちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るはすなはち一乗を究竟するなり。異の如来まします。異の法身まします。如来はすなはち法身なり。一乗を究竟するはすなはちこれ無辺不斷なり。大乗は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。

(『聖典全書』一巻55頁) (『註釈版』197頁)

【91】 「海」といふは、久遠よりこのかた凡聖所修の雜修・雜善の川水を転じ、逆謗闡提・恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実・恒沙万徳の大宝海水と成る。これを海のごとくに喩ふるなり。まことに知んぬ、『經』に説きて「煩惱の氷解けて功德の水と成る」とのたまへるがごと

し。〔以上〕

願海は二乗雜善の中・下の屍骸を宿さず。いかにいはんや人・天の虚
仮・邪偽の善業、雜毒雜心の屍骸を宿さんや。

類文

「行文類」一乗海釈

〔『聖典全書』一巻57頁〕（『註釈版』199頁）

【98】 しかるに教についで念仏諸善比較討論するに、難易対、頓漸対、横豎対、超涉対、順逆対、大小対、多少対、勝劣対、親疎対、近遠対、深浅対、強弱対、重輕対、広狭対、純雜対、径迂対、捷遲対、通別対、不退退対、直弁因明対、名号定散対、理尽非理尽対、勸無勸対、無間間対、断不断対、相続不続対、無上有上対、上下下対、思不思議対、因行果徳対、自説他説対、回不回向対、護不護対、証不証対、讚不讚対、付属不属対、了不了教対、機堪不堪対、選不選対、真仮対、仏滅不滅対、法滅利不利対、自力他力対、有願無願対、摂不摂対、入定聚不入対、報化対あり。この義かくのごとし。しかるに本願一乗海を案ずるに、円融満足極速無碍絶対不二の教なり。

【99】 また機について討論するに、信疑対、善惡対、正邪対、是非対、実虚対、真偽対、淨穢対、利鈍対、奢促対、豪賤対、明闇対あり。この義かくのごとし。しかるに一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は絶対不二の機なり、知るべし。

〔化身土文類〕觀經隱顯（『聖典全書』二巻196頁）（『註釈版』394頁）

「門余」と言は、「門」は即ち八万四千の仮門也、「余」は則ち本願一乗海なり。

【35】 凡そ一代の教に就て、此の界の中にして入聖得果するを聖道門と名く、難行道と云へり。此の門の中に就いて、大・小、漸・頓、一乗・二乗・三乗、權・実、顯・密、豎出・豎超あり。則ち是れ自力、利他教化地、方便權門の道路也。安養淨刹にして入聖証果するを淨土門と名く、易行道と云へり。この門の中に就いて、横出・横超、仮・真、漸・頓、助正・雜行、雜修・專修あるなり。正とは五種の正行なり。助とは名号を除きて以外の五種これなり。雜行とは、正助を除きて以外をことごとく雜行と名づく。これすなはち横出・漸教、定散・三福、三輩・九品、自力仮門なり。横超とは、本願を憶念して自力の心を離る、これを横超他力と名づくるなり。これすなはち專のなかの專、頓のなかの頓、真のなかの真、乗のなかの一乗なり。これすなはち真宗なり。すでに真実行のなかに顯しをはんぬ。

『愚禿鈔』

〔『聖典全書』一巻284頁上〕（『註釈版』503頁）

【13】 ただ阿弥陀如来の選択本願（第十八願）を除きて以外の、大小・權実・顯密の諸教は、みなこれ難行道、聖道門なり。また易行道、淨土門の教は、これを淨土回向発願自力方便の仮門といふなりと、知るべし。

〔『聖典全書』一巻286頁下〕（『註釈版』507頁）

【38】 本願一乗は、頓極・頓速・円融・円満の教なれば、絶対不二の教、一実真如の道なりと、知るべし。專がなかの專なり、頓がなかの頓なり、真のなかの真なり、円のなかの円なり。一乗一実は大誓願海なり。〔第一希有の行なり。〕

（『聖典全書』一巻287頁上）（『註釈版』508頁）

【43】 一教対

本願一乗海は、頓極・頓速・円融・円満の教なりと、知るべし。

浄土の要門は、定散二善・方便仮門・三福九品の教なりと、知るべし。

（『聖典全書』一巻288頁下）（『註釈版』510頁）

【47】 一機対

一乗円満の機は、他力なり。

漸教回心の機は、自力なり。

『一念多念文意』

（『聖典全書』一巻673頁）（『註釈版』690頁）

この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらへて、本願一乗円融無碍真実功德大宝海にをしへすすめ入れたまふがゆゑに、よろづの自力の善業をば、方便の門と申すなり。いま一乗と申すは本願なり。円融と申すは、よろづの功德善根みちみちてかくることなし、自在なるころなり。無碍と申すは、煩惱悪業にさへられず、やぶられぬをいふなり。真実功德と申すは名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆゑに、大宝海にたとへたまふなり。一実真如と申すは無上大涅槃なり。涅槃すなはち法性なり、法性すなはち如来なり。宝海と申すは、よろづの衆生をきはらず、さはりなくへだてず、みちびきたまふを、大海の水のへだてなきにたとへたまへるなり。この一如宝海よりかたちをあらはして、法蔵菩薩となりのたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆゑに、報身如来と申すなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり。この如来を南無不可思議光仏とも申すなり。この如来を方便法身とは申すなり。方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ不可思議光仏と申すなり。この如来、十方微塵世界にみちみちたまへるがゆゑに、無辺光仏と申す。しかれば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。

【釈名】

本願

Q 本願の釈名如何。

A 「因本の誓願」「根本の誓願」の両義あり。

Q 因本の誓願とは？

A 因本は果末に対する語で、因位の菩薩の誓願をいう。

Q 果末とは？

A 誓願成就の成仏。

Q 菩薩の誓願にはどんなものがあるか？

A 総願と別願

『選択集』本願章（『聖典全書』一卷頁）（『註釈版』七祖篇1202頁）

わたくしにいはく、一切の諸仏のおの総別二種の願あり。「総」といふは四弘誓願これなり。「別」といふは釈迦の五百の大願、薬師の十二の上願等のごときこれなり。いまこの四十八の願はこれ弥陀の別願なり。

四弘誓願

衆生無辺誓願度 煩惱無数誓願断 法門無尽誓願学 仏道無上誓願成

Q 本願を「因本の誓願」としたとき、本願は何か？

A 阿弥陀仏が成就した法蔵菩薩因位の誓願、すなわち四十八願全体を指す。

『選択集』特留章（『註釈版』七祖篇1227頁）

おほよそ四十八願みな本願なりといへども

Q 「根本の誓願」根本とは如何

A 草木の根元で、枝葉などを出すから出生の義がある。枝末に対する。

Q 根本と枝末はそれぞれ何か。

A 根本は第十八願。枝末は四十八願および釈尊一代の説法。

Q 枝末が四十八願という文証如何。

A 「本願中之王」という立場です。

『選択集』特留章（『聖典全書』一卷1284頁）（『註釈版』七祖篇1227頁）

おほよそ四十八願みな本願なりといへども、

殊に念仏をもつて往生の規となす。

ゆゑに善導釈していはく（法事讃・上）、「弘誓、門多くして四十八なれども、ひとへに念仏を標してもつとも親しとなす。人よく仏（阿弥陀仏）を念ずれば、仏還りて念じたまふ。専心に仏を想へば、仏、人を知りたまふ」と。（以上）

（枝末）

ゆゑに知りぬ、四十八願のなかに、

（根本）

すでに念仏往生の願（第十八願）をもつて本願中の王となすと

いふことを。

Q 枝末が釈尊一代の説法という文証如何。

『漢語灯録』卷七 逆修說法 第三七日 大經（『聖典全書』六卷155頁）

その四十八願の中に第十八の念仏往生の願を以て本体と為す也。

故に善導の曰く「弘誓多門四十八、偏標念仏最為親」云云。念仏往生とは源と此の本願従り起れり。然ば

（枝末）

『觀經』『弥陀經』所説の念仏往生の旨も、乃至

余の諸經の中に説く所も

（根本）

皆この經に説く所の本願を以て根本と為す也。

第十八願を真実五願に開く見方もある

（『註釈版』補註17 本願）参照ください

一乗

Q 一乗の積名如何。

A 唯一の運載する教法。梵語 cka-yāna。

Q 唯一とは？

A 無二。二や三などの数量を超えて一切を包含して対するものない絶対をあらわす。

（天台用語では絶待^{ぜつたい}というが、開会などの思想が混同しないように宗祖はこの語を使わない。）

Q 文証如何。

A 「行文類」出拠の文（『聖典全書』二卷、54頁）（『註釈版』195頁）に

二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。

Q 文意如何。

A 二乗三乗を超えて、二乗三乗をあらしめるような意義を持つ教法を一乗という。

Q 乗の字義如何。

A （諸橋大漢和辞典）

①のる。のせる。舟・車などにのる。馬などにまたがる。「広韻」賀也、登也。

④しのぐ。勝つ。もと楽に作る。「説文」楽、覆也。「伝」乗、勝也。

「行文類」大行釈 引文「玄義分」 頭注（『聖典全書』二卷34頁）（『註釈版』168頁）

みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざるはなし。

乗字 食陵反 又宝証反 ^{ガ・ノル}駕也

勝也 ^{トウ・ノボル}登也 ^{マモル}守也 ^{フク・オ、ウ}覆也

（『親鸞聖人真蹟集成』一卷、83頁）



Q 仏教で乗の意味は？

A 運載の義。教法のこと。法のはたらきを船や車の乗り物に譬えた。衆生を迷いから覚りへのせてはこぶもの。

『大乘起信論』(T32.584b) 大乘を釈して

三には用大。能く一切世出世間善因果を生ずるが故に。一切諸仏の本所乗の故に。一切の菩薩は皆此の法に乗じて如来地に到るが故に。

『大乘四法経釈』(T26.364a)

乗と言ふは運載の義なり。生死を此岸とし、涅槃を彼岸と名け、有情を中流と名く。此の経所説の四種の法船は有情を運載して生死の海を超えて涅槃にいたらしむ。故に名けて乗とす。

『大経』巻下 衆生往生果 (『聖典全書』一巻50頁) (『註釈版』52頁)

猶大乘の如し、群萌を運載して生死を出すが故に。

『行文類』一乗海釈 一乗嘆徳 (『聖典全書』二巻58頁) (『註釈版』200頁)

猶大車の如し。普く能く諸の凡聖を運載するが故に。

Q 運載の様子如何。

A 一切の迷いの衆生を運載して煩惱生死の濁流を越え、菩提涅槃に至らしめる教法を一乗という。

【義相】

一乗の釈（体）

出体

A Q 出抛の文を読め。

【『聖典全書』二巻付録科段】 『聖典全書』二巻54頁 （『註釈版』195頁）	（梯實圓和上『聖典セミナー教行信証』教行の巻323頁）
【異名を会合す】 「一乗海」といふは、「一乗」は大乘なり。大乘は仏乗なり。	一乗海というのは、一乗とは大乘です。大乘とはすべてのものが仏になることのできる法を説く教えですから、仏乗ともいいます。
【一乗の力を釈す】 一乗を得るは阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなはちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなはちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るはすなはち一乗を究竟するなり。 異の如来まします。異の法身まします。如来はすなはち法身なり。一乗を究竟するはすなはちこれ無辺不断なり。	一乗を得るものは、最高のさとりを得ます。最高のさとりとは、涅槃の境界です。涅槃の境界とは、究極のさとりそのものである究竟法身のことです。究竟法身を得るということは、一乗の法を究め尽くすことです。 このほかに異なった如来はありませんし、異なった法身もありません。如来は、すなわち法身なのです。一乗の法を究め尽くすということは、空間と時間の制約を超えた領域に達することです。
【対弁・出体】 大乘は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。 一乗はすなはち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。	真の大乘からいえば、二乗とか三乗というような教えは実体としてあるわけではありません。二乗とか三乗というような教えは、未熟なものを育て導いていくための方便として、仮にしばらく設定された教えであって、唯一無二の真実教である一乗に引き入れようとして説かれただけのものです。 一乗は最高の真実が顕現している教え（第一義乗）です。真の一乗といわれるものは、一切の衆生を平等に救って往生成仏させる阿弥陀仏の誓願一仏乗だけです。

Q 一乗とは何か（一乗の物体如何）。

A 「大乘」「仏乗」あるいは「第一義乗」「誓願一仏乗」と転釈されている。

「大乘」

大は包含。乗は運載。

虚空が万物を包含しているように、一切の衆生を善悪賢愚の隔てなく包摂し、一機ももらさず運載して成仏させる教法をいう。

「仏乗」

一切衆生を仏果に至らしめる教法をいう。

「第一義乗」

最勝の義理が顕現している教法。真如実相が顕現している教法。

「第一義諦」（註釈版巻末註）

梵語パラマールタ・サティヤ paramārtha-satya の漢訳。真如実相のこと。無上にして絶対的な真理という意。真諦・勝義諦に同じ。世俗諦に対する語。第一義は勝義とも扱われる領域で真諦ともいい、分別の領域である世俗諦に対する領域である。

「誓願一仏乗」

このような一乗のいわれを完全に満たしている教法は阿弥陀仏の誓願一仏乗だけである。この無分別一如の救済に乗託することを誓願一仏乗と結んでいかれるのであった。

【参考】《一は無量》

『真仏土文類』引文（涅槃經）（『聖典全書』二卷166頁）（『註釈版』352頁）

〈如来世尊、国土のためのゆゑに、時節のためのゆゑに、他語のためのゆゑに、人のためのゆゑに、衆根のためのゆゑに、一法のなかにおいて二種の説をなす。一名の法において無量の名を説く、一義のなかにおいて無量の名を説く、無量の義において無量の名を説く。〉

いかんが一名に無量の名を説くや。なほし涅槃のごとし。また涅槃と名づく、また無生と名づく、また無出と名づく、また無作と名づく、また無為と名づく、また帰依と名づく、また窟宅と名づく、また解脱と名づく、また光明と名づく、また灯明と名づく、また彼岸と名づく、また無畏と名づく、また無退と名づく、また安処と名づく、また寂静と名づく、また無相と名づく、また無二と名づく、また一行と名づく、また清涼と名づく、また無闇と名づく、また無碍と名づく、また無諍と名づく、また無濁と名づく、また廣大と名づく、また甘露と名づく、また吉祥と名づく。これを一名に無量の名を作ると名づく。いかんが一義に無量の名を説くや。なほし帝釈のごとし。

【参考】《一は無量・・・煩惱・解脱・・・広中説略・略中説広・第一義諦》

また一義に無量の名を説くことあり。いはゆる陰のごとし。また名づけて陰とす、また顛倒と名づく、また名づけて諦とす、また名づけて四念処とす、また四食と名づく、また四識住処と名づく、また名づけて有とす、また名づけて道とす、また名づけて時とす、また名づけて衆生とす、また名づけて世とす、また第一義と名づく、また三修と名づく、いはく身・戒・心なり。また因果と名づく、また煩惱と名づく、また解脱と名づく、また十二因縁と名づく、また声聞・辟支仏と名づく、仏をまた地獄・餓鬼・畜生・人・天と名づく、また過去・現在・未来と名づく。これを一義に無量の名を説くと名づく。

善男子、如来世尊、衆生のためのゆゑに、広のなかに略を説く、略のなかに広を説く。第一義諦を説きて世諦とす、世諦の法を説きて第一義諦とす」と。〔略出〕

力用

Q 一乗の力用如何。

A 私が成仏せしめられる力用。

私が仏となるとき覚る智慧と覚られる涅槃界は無分別一如である。これが一乗を究竟するすがたである。一乗を究竟するすがたは分別の私を無分別の法身たらしめる

得一乗者	「一乗を得るは」と読めば法をあらわし、大行を指す。 「一乗を得るものは」と読めば受法の機をあらわし、大信を指す。 総じて行信・教機の 因徳 （能証の智慧）をあらわす。	私と
得阿耨多羅三藐三菩提 阿耨菩提者即是涅槃界 涅槃界即是究竟法身 一乗を究竟する	果徳 （所証の境）の仏智をあらわす。 能証の智慧と所証の境とが 無分別一如 ならしめられて、因果の相対も絶せられていく。	仏が 無分別一如である これが一乗を究竟するすがたである
異の如来まします 異の法身まします	敬語を用いて訓じているのは、法蔵菩薩の因果も、衆生往生の因果も 如来より回向 されていることをいう。 相対を絶した一如から救済活動が發起して、衆生を無分別の真如へ帰せしめていく全相が示されている。	このはたらきは 一如を本源とする
無辺不断	空間も時間も有上である分別の衆生に 空間無辺際、時間無断絶 をあらしめる接点を示す。	一乗を究竟するすがたは 分別の私を無分別の法身たらしめる

眞実と権仮

Q 続けて出拠の文を読め。

A 「大乘は二乗・三乗あることなし。」

Q 二乗三乗とは何か。

A 二説ある。

①二乗 声聞乗・縁覚乗

三乗 これらに菩薩乗を加えて三乗とする

②二乗 声聞乗・縁覚乗・菩薩乗

三乗 これらに華嚴や天台の一乗を加えて三乗とする

Q ①の声聞乗・縁覚乗および菩薩乗を説明せよ。

A (『註釈版』巻末註)

しよつもん〔声聞〕 梵語シュラーヴァカ (śrāvaka) の漢訳。声を聞く者の意。仏の説法の声を聞いてさとする者をいう。もとは釈尊在世当時の弟子を指したが、二乗・三乗の一に数える場合は、仏の教説に従って修行するものの、自己の解脱のみを目的とする小乗の聖者の意とする。

えんがく〔縁覚〕 梵語プラティエーカーブツダ (pratyeka-buddha) の漢訳。因縁の理を觀じてさとする者。また、師なくして飛花落葉を觀て独自にさとりを開き、他に説法しようとしなない者。独覺・辟支仏ともいう。

ぼさつ〔菩薩〕 梵語ボーディサットヴァ (bodhisattva) の音写。菩提薩埵ともいい、覺有情・道衆生・道心衆生などと漢訳する。さとりを求める者。大乘仏教では自ら菩提を求め(上求菩提)、一切衆生を利益しよう(下化衆生)とする者のことをいい、利他的意義を強調するようになった。菩薩が仏果(仏のさとり)に至るまでの階梯については、一般に『瓔珞經』の五十二位説が用いられる。十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺の五十二段階である。

聖位		凡位			邪定聚
果	因	三賢	内凡	外凡	
妙覺	等覺	十廻向	十住	十信	
妙覺性	等種性	道種性	性種性	習種性	不定聚
	正定聚				

十信位を外凡、十住・十行・十回向を内凡・三賢、十地を十聖といい、また、十住を習種性、十行を性種性、十回向を道種性、十地を聖種性、等覺を等覺性、妙覺を妙覺性の六種性とする。

Q ②説に「二乗」といいながら声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の三つじゃないか

A 縁覚を声聞に摂め、菩薩乗と合わせて二乗とする。

Q 例証ありや

A 『大経』下巻 東方偈

行文類に引文（『聖典全書』二巻56頁）（『註釈版』197頁）

【92】ゆゑに『大本』（大経・下）にのたまはく、「声聞あるいは菩薩、よく聖心を究むることなし。たとへば生れてより盲ひたるものの、行いて人を開導せんと欲はんがごとし。如来の智慧海は深広にして涯底なし。二乗の測るところにあらず。ただ仏のみ独りあきらかに了りたまへり」と。〔以上〕

Q どうして縁覚を略するのか。

A 『大経』は釈尊が阿弥陀仏を説くのを聞いて仏道を得る。無師独悟ではない。

Q ①説、②説どちらを取るか。

A 今は②説を取る。

Q 理由如何。

A 宗祖は聖道門を指して、「一乗・二乗・三乗」と示しているから。

「化身土文類」三経隠顕（『聖典全書』二巻196頁）（『註釈版』394頁）

【35】 おおよそ一代の教について、この界のうちにして入聖得果するを聖道門と名づく、難行道といへり。この門のなかにして、大・小、漸・頓、一乗・二乗・三乗、権・実、顕・密、豎出・豎超あり。すなはちこれ自力、利他教化地、方便権門の道路なり。

Q この化巻の文の「一乗・二乗・三乗」とは何を指すのか？

A 一乗（大乘）（頓）華嚴や天台の一乗	十一乗	実	利他教化地
二乗（小乗）（漸）声聞乗・縁覚乗	二乗		
三乗（大乘）（漸）法相（菩薩乗）	三乗		
これらを「二乗三乗あることなし」としているのだから②説を取る。		権	方便権門の道路

Q 華嚴・天台の教法は一乘法と認めているのか？

A 一切衆生には仏性があり、廃悪修善して仏道を歩む。一切衆生が仏道を歩むという点を華天が一乗と名乗っているのでそう表現している。

Q 今家の一乗と同一如何。

A 華天は善人が仏道を歩む。今家は善人悪人を簡はず救う。

Q 「化身土文類」の聖道門の文に「権・実」とあるがそれぞれ何か？

A 権は声聞・縁覚・および法相の菩薩乗を指す。

実 は 仏心（禅宗）・真言・法華・華嚴。

『二巻鈔』（『聖典全書』二巻二八三頁）（『註釈版』501頁）

一には難行聖道の実教なり。いはゆる仏心・真言・法華・華嚴等の教なり。
Q 聖道門の実教は「実教」といいながら「二乗三乗有ること無し」とか「方便権門」という権実如何。

A 因人が修すれば方便。果人が還相して修すれば実。

Q 聖道の実教は頓教、速疾に成仏するのではないか？

A 理論的には速疾成仏を語り得ても、実際には三祇百劫の修行を必要とする漸教権教になる。
・ 末法の劣機には難証の法である

「化卷」結説総勸（『聖典全書』二卷210頁）（『註釈版』413頁）

【69】 まことに知んぬ、聖道の諸教は在世・正法のためにして、まつたく像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乗けるなり。浄土真宗は在世・正法・像末・法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したまふをや。

Q 難証とは「さとることが難しいけれど、条件を整えば覚ることができる」という意味か？

A 「難」は不可の意味で、聖人であっても凡夫であっても、自力では大涅槃に至らない

『唯信鈔文意』（『聖典全書』二卷385頁）（『註釈版』700頁）

しかれば大小の聖人・善惡の凡夫、みなともに自力の智慧をもつては大涅槃にいたることなければ、無碍光仏の御かたちは、智慧のひかりにてましますゆゑに、この仏の智願海にすすめ入れたまふなり。

・聖道の菩提心は凡夫には起こし得ない

『正像末和讃』第16首（『聖典全書』二卷476頁）

自力聖道の菩提心 こころもことばもおよばれず

常没流転の凡愚は いかでか發起せしむべき

Q 聖道門が利他教化地であるというのはどういう意味か？

A 聖道門は阿弥陀仏の浄土から来現してきた還相の菩薩の利他行として説かれている教法である。

『末灯鈔』第一通（『聖典全書』二卷778頁）（『註釈版』736頁）

聖道といふは、すでに仏に成りたまへる人の、われらがこころをすすめんがために、仏心宗・真言宗・法華宗・華嚴宗・三論宗等の大乘至極の教なり。

仏心宗といふは、この世にひろまる禅宗これなり。また法相宗・成実宗・俱舍宗等の権教、小乗等の教なり。これみな聖道門なり。権教といふは、すなはちすでに仏に成りたまへる仏・菩薩の、かりにさまざまの形をあらはしてすすめたまふがゆゑに権といふなり。

Q 「二乗三乗あることなし」の文意如何。

A 阿弥陀如来の選択本願を除いた釈尊一代の法門は権仮であり、実体としては存在しない。

Q 権仮とは？

A 権 かり まにあわせ 方便 権時＝暫時しばらく 権用かりにもちいる

仮 かり しばらく 仮設かりにもうける

暫く用いるが、真実に入れば還つて廃する。

【参考】 『選択集』念仏付属章（『聖典全書』一卷1316頁）（『註釈版』1274頁）

いままた善導和尚、諸行を廃して念仏に帰する所以は、すなはち弥陀の本願たる上、またこれ釈尊の付属の行なり。ゆゑに知りぬ、諸行は機にあらず時を失す。念仏往生は機に当り、時を得たり。感応あに唐捐せんや。まさに知るべし、随他の前にはしばらく定散の門を開くといへども、随自の後には還りて定散の門を閉づ。一たび開きて以後永く閉ぢざるは、ただこれ念仏の一門なり。弥陀の本願、釈尊の付属、意これにあり。行者知るべし。

Q 「実体としては存在しない」とはどういう意味か。

A 二乗三乗は一乗を本源として、機根の成熟度に応じて仮に暫く設けられた教えであるから、本来一乗の他に実体としてあるものではない。

引入の義

Q 釈尊が二乗三乗の教えを説いたのはなぜか？

A 「二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。」

Q 文意如何。

A 「二乗・三乗」は「一乗」に引入せしめる教法である。

阿弥陀如来の選択本願を除いた釈尊一代の法門は選択本願の法に帰入させるために説かれたもの。唯一無二の一乗を受けいれることのできる者に育てるために、

『一念多念文意』（『聖典全書』二巻673頁）（『註釈版』690頁）

おほよそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門といふ。これを仮門となづけたり。この要門・仮門といふは、すなはち『無量寿仏觀經』一部に説きたまへる定善・散善これなり。定善は十三觀なり、散善は三福九品の諸善なり。これみな浄土方便の要門なり、これを仮門ともいふ。この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらへて、本願一乗円融無碍真実功德大宝海にをしへすすめ入れたまふがゆゑに、よろづの自力の善業をば、方便の門と申すなり。いま一乗と申すは本願なり。

「大乘は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。」の文について、天台との開会構造と異にした真実方便の關係を読み取らなければならない。天台は辺即中といまた開会という。方便であることを知って、迷情晴れて、自力修行はそのまま続けられる。真宗は二乗・三乗の自力善人も悪人も簡ばず願海に引き受けられて、自力根性が浄化される。

【参考①】法相の三乗、華嚴・天台の一乗

Q 法相の三乗、華嚴・天台の一乗を説明せよ

A

法相宗

三乗 真実（機根に応じて格別の三乘法がある）

（五性格別）菩薩定姓 独覚定姓 声聞定姓 不定種姓 無性有情
成仏するのは菩薩定姓と不定種姓の一部

一乗 方便（三乗に実体が無く、あるのは一乗だけだということが方便）

華嚴・天台

三乗 方便（未熟な者を育てるために唯一の成仏道である一仏乗から、仮に暫く設けた方便）

一乗 真実（一乗の他に実体はない）

Q 華嚴や天台はどうして一乗真実をいうのか。

A 真実の仏教は「一切衆生悉有仏性」と説き、すべての者が速やかに仏に成ることができると主張した。声聞縁覚や法相宗などは漸教であるばかりか、仏になれる者と仏になれない者とがあると説くから、仏が本意を隠して未熟の機に説かれた権仮方便であると判じた。

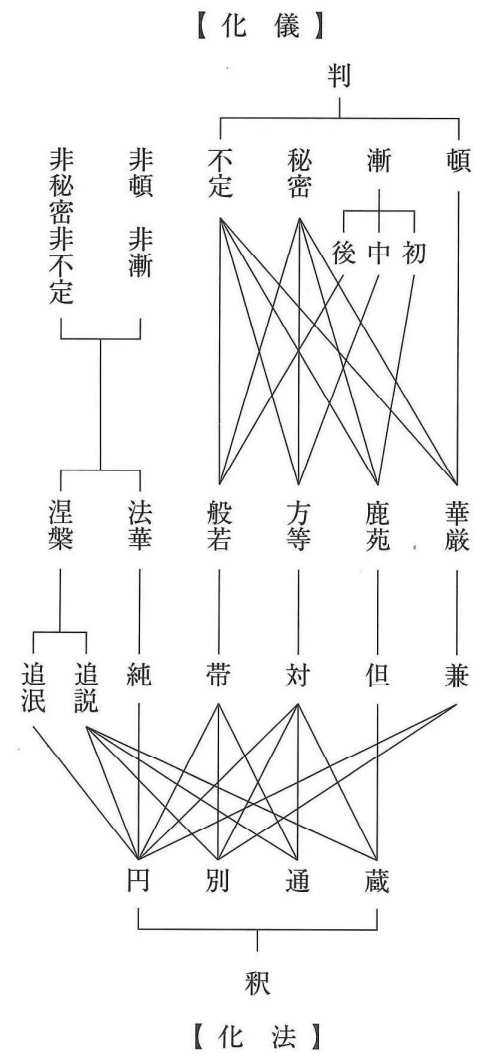
華嚴

①小乗教	声聞と縁覚のために説かれた法。	二乗
②大乘始教	二乗は成仏しない。五性格別。	三乗
③終教	いかなる衆生にも如来の本性が蔵されている。	一乗 同教一乗 三乗教に同調した一乗
④頓教	②③は漸教。時間空間を超絶する。言説を用いない。	
⑤円教	事事無碍法界。 事と理が相即無碍。 さらに事と事が相即相入円融無碍	別教一乗 三乗教をはるかに別する。 三乗教は一乗教より流出。 三乗教は一乗教に帰入。 別体無し。

天台

(『釈尊の教えとその展開—中国・日本篇—』勸学寮編153頁)

第一図 五時八教



藏教
通教
別教
円教

声聞緣覺を教化することが中心。正化二乗・傍化菩薩。
大乘初門。菩薩を教化することが中心。正化菩薩・傍化二乗。
菩薩のみに説かれる純大乘。虚妄↓空↓仮↓中と一歩一歩仏道を歩む。
円頓。空仮中の三諦が円融相即であるとな念の頓速に円具する。
本来仏に成るべき身であること知り、方便であることを知って、迷情晴れて、
修行はそのまま続けられる。

開会

第四般若時

法開会 般若皆空。般若の智慧によって大乘小乗の偏執が破られる。

「唯有一乘法無二亦無三」一切法は大乘である

第五法華涅槃時

機根が熟した声聞緣覺に方便をまじえず真実（法華經）をそのまま説いた。

人開会 三乗を開会して一乗を顯す。今まで説いてきたのは方便であつてこれから説くのが真実であると宣言された。

会三歸一 三乗を開会して一乗に歸する。三乗それぞれに説いた法はすべて仏乗である。

【参考② 二双四重】

Q 宗祖は仏教の真仮をどのように見ているか？

A (一応) 二双四重に分けて二権二実と判じる

(再往) 三権一実を明らかにしている

「信文類」菩提心釈 (『聖典全書』一巻91頁) (『註釈版』246頁)

「化身土文類」三経隠顯 (『聖典全書』一巻196頁) (『註釈版』394頁)

		信文類		化身土文類		①説	②説
聖道門 難行道	漸教 (豎出)	小乗	曆劫迂回の菩提心、自	一乗二乗三乗	二乗 声・縁	三乗 菩薩	二乗
	頓教 (豎超)	実大乘	力の金剛心、菩薩の大 心	利他教化地 方便権門の道路	十一乗		声聞或菩薩
浄土門	漸教 (横出)	要門 (眞門)	他力中の自力の菩提心	自力仮門			
	頓教 (横超)	弘願	横の大菩提心 横超の金剛心	横超他力 乗中の一乗	一乗		
易行道							

『一巻鈔』上 (『聖典全書』一巻一八三頁) (『註釈版』502頁)

『同』下 (『聖典全書』一巻一九五頁) (『註釈版』519頁)

大乘		漸教		(権)	
頓教 (実)	難行聖道の実教 (豎超) 即身是仏・即身成仏等の証果 易行淨土本願真実の教 (横超)	生	大無量寿経 選択本願・真実報土・即得往	一乗	三乗 菩薩 十一乗
	難行道聖道権教 (豎出) 易行道淨土の要門 (横出)	法相 等 (三論) 曆劫修行の教・曆劫修行の証 観経 淨土胎宮・辺地・懈慢の往生	三乗 菩薩 二乗 菩薩		
小乗		縁覚教	麟喻独覚 (二人で修行)、 部行独覚 (仲間を組んで修行)	二乗	二乗 声聞
		声聞教	預流果・向 一來果・向 不還果・向 阿羅漢果・向		

預流とは聖者の流れに入ること、最大7回欲界の人と天の間を生れかわれば悟りを開く位。
一來とは1回人と天の間を往来して悟りに至る位。

不還は欲界には再び還らず色界に上って悟りに至る位。

阿羅漢は今生の終りに悟り涅槃に至り再び三界には生れない位をいう。(wikidharma「ブク」)

メモ

◇浄土の要門真門は自力の法門であるという意味で自力聖道門に摂め、誓願一仏乗を除くすべての法門を一括して「二乗三乗」の権仮方便とする。

◇『本典』の二双は聖道・浄土の対。法然聖人『選択集』の法門が仏道として成立することを証明する。聖浄二門から機行の難易を明かし、自力菩提心を廃捨して如来回向の菩提心を立つ。

「一乗海釈」は究極の三権一実で語る。

◇『二巻鈔』は権・実の対。成仏の遅速によって教法の真仮を明かす。

◇『一巻鈔』の三権一実（『註釈版』503頁）

（一実）【13】ただ阿弥陀如来の選択本願（第十八願）を除きて

（三権）以外の、大小・権実・顕密の諸教は、みなこれ難行道、聖道門なり。また易行道、浄土門の教は、これを浄土回向発願自力方便の仮門といふなりと、知るべし。

引文 『涅槃經』『華嚴經』く引証ではないく 浄土で実現する利益

Q 『涅槃經』『華嚴經』の二經は華嚴や天台ではどんな經か？

A 天台で『涅槃經』は『法華經』と同じ醍醐味の円教。釈尊最後の説法。華嚴で『華嚴經』は事事無碍法界縁起を説く円教。釈尊最初の説法。

Q この引文の内容は何か。

A 語は此土得生の經に依っているが、浄土で実現する利益を表している。引文を結んで

【90】 しかれば、これらの覚悟はみなもつて安養浄利の大利、仏願難思の至徳なり。

というが故に。

Q その覚りの内容は如何。

A 『涅槃經』……一乗の本体である「一切衆生悉有仏性」をさとり顕す

『華嚴經』……一道より生死を出て一法身を証得する

これらは無明に覆われている今生では実現不可能で、浄土で実現する利益である。

Q 随文せよ

A

『涅槃經』第一文 一乗無二。覺る眞実は、清らかなただ一つの道であり、

二つあることはない

『涅槃經』第二文 開一説三。覺れば衆生（声聞・縁覺・菩薩）に応じて説教する

『涅槃經』第三文 究竟是一。仏性を覺る

『涅槃經』第四文 三一双非。数で限定することのできない法を覺る

『華嚴經』 一乗無二。因一・果一。一切仏は一法で出離し、覺る智慧も力もひとつ

『本典研鑽集記』 上292	本文（『註釈版』195頁）	現代語版『顕浄土眞実教行証文類』125頁
一乗無二	【85】 『涅槃經』（聖行品） にのたまはく、「善男子、実諦は名づけて大乘といふ。大乘にあらざるは実諦と名づけず。善男子、実諦はこれ仏の所説なり。魔の所説にあらず。もしこれ魔説は仏説にあられざれば、実諦と名づけず。善男子、実諦は一道清浄にして二つあることなし」と。〔以上〕	【八五】 『涅槃經』に説かれている。 「善良なものよ、眞実の教えを大乘という。大乘でないものは眞実の教えとはいわない。善良なものよ、眞実の教えとは仏の説かれたもので、悪魔の説いたものではない。悪魔の説いたものは、これは仏の説かれたものではないから、眞実の教えとはいわないのである。善良なものよ、眞実の教えは、清らかなただ一つの道であり、二つあることはない」
開一説三	【86】 またのたまはく、（徳王品）「いかに菩薩、一実に	【八六】 また次のように説かれている「〔涅槃經〕」。「どうして、菩薩は一乗の法に信順するの

随自意語 随他意語 不逆	信順する。菩薩は一切衆生をしてみな一道に帰せしむと了知するなり。一道はいはく大乘なり。諸仏・菩薩、衆生のためのゆゑに、これを分ちて三つとす。このゆゑに菩薩、不逆に信順す」と。〔以上〕 衆生に違逆せず二乗三乗あればその機に応じて分一説三する か。菩薩は、仏がすべての衆生を導いて、みなその一道に入らせることを、明らかに知っている。一道とは大乘の教えである。仏や菩薩たちは、さまざまな衆生のために、仮に、声聞の教え・縁覚の教え・菩薩の教えと、三乗に分けて説かれているのである。だから、菩薩は一乗の法に信順するのである」
究竟是一	【87】 またのたまはく（涅槃經・師子吼品）、「善男子、畢竟に二種あり。一つには莊嚴畢竟、二つには究竟畢竟なり。一つには世間畢竟、二つには出世畢竟なり。莊嚴畢竟は六波羅蜜なり。究竟畢竟は一切衆生得るところの一乗なり。一乗は名づけて仏性とす。この義をもつてのゆゑに、われ一切衆生悉有仏性と説くなり。一切衆生ことごとく一乗あり。無明覆へるをもつてのゆゑに、見ることを得ることあたはず」と。〔以上〕 【八七】 また次のように説かれている〔涅槃經〕。「善良なものよ、畢竟に二種がある。一つは莊嚴畢竟、もう一つは究竟畢竟である。これをそれぞれ世間畢竟とも出世畢竟ともいう。莊嚴畢竟とは六波羅蜜の行であり、究竟畢竟とはすべての衆生が得る一乗の道である。この一乗の道を仏性という。このようなわけで、わたしはへすべての衆生にことごとく仏性がある」と説くのである。すべての衆生は、ことごとく一乗の道を得ることができる。ただ煩惱におおわれているから、これを見ることができないのである」
莊嚴畢竟 縁因と了因（世間畢竟、出世畢竟）六波羅蜜 究竟に非ず 究竟畢竟 正因。仏性。 無明覆へるをもつてのゆゑ……真仏土文類の造語のもと	究竟に非ず
三一 双非 非三 大乘無有二乗三乗	【88】 またのたまはく（同）、 【八八】 また次のように説かれている〔涅槃經〕。 「なぜ一とするのか。すべての衆生が、ことごとく一乗の道を得るからである。」
非一 二乗三乗令入一乗	なぜ非一とするのか。仮に三乗に分けて説かれるからである。
非一・非非一 一乗即是第一義乗也	なぜ一でもなく非一でもないとするのか。一乗の道は数で限定することのできないものだからである」
一乗無二	【89】 『華嚴經』（明難品・晋訳）にのたまはく、「 【八九】 『華嚴經』に説かれている。 「

	因一 法一 機一 果一 所証法身平等	
【90】 しかれば、これらの覚悟はみなもつて安養淨刹の大利、仏願難思の至徳なり。	文殊の法はつねにしかなり。法王はただ一法なり。 一切の無碍人、一道より生死を出でたまへり。 一切諸仏の身、ただこれ一法身なり。 能証智力平等 一心一智慧なり。 力・無畏もまたしかなり」と。 〔以上〕	
【九〇】 だから、これらのさとりはみな、淨土で得られる大いなる利益であり、本願によつて得られるはかり知ることのできない功德である。	文殊の法は本来不変である。 法の王とはただ一つの法のことである。 すべての仏がたは、この一道によつて迷いを出られた。 だからすべての仏がたの法身は、ただ一つの法身である。 一つの心であり、一つの智慧である。 力も徳も同様である」	

海の釈 (徳)

Q 海は何を譬えているのか

A 出抛の文冒頭に「一乗海」と標されている。一乘法が万人を救済することを海に譬えている。

Q 文意如何。

『聖典全書』二卷55頁 〔註釈版〕197頁)	(梯實圓和上『聖典セミナー教行信証』教行の 卷324頁)	メモ
「海」といふは、久遠よりこの かた	「海」というのは、久遠の昔から今まで、	同一鹹味 一味平等 (機)
凡聖所修の雑修・雑善の 川水を転じ、	凡夫であれ聖者であれ、自力で修めてきたさまざま な川の水に等しいような雑行・雑修の善根 を転換し、	転善
逆謗闡提・恒沙無明の 海水を転じて、	悪人が積み重ねてきた、大海の水ほどもある五 逆罪、謗法罪、一闡提など、数限りない無明煩 悩の濁水を転換して、	転悪
本願大悲智慧真実・恒沙万徳の 大宝海水と成る。これを海のご ときに喩ふるなり。	本願によって成就された大悲智慧の真実なる無 量功徳の宝の海水に成らせることです。この転 成のはたらきを海のようにだと喩えたのです。	転成
まことに知んぬ、『経』に説 きて「煩惱の氷解けて功徳の水 と成る」とのたまへるがごとし。 〔以上〕	これによって経に「煩惱の氷がとけて功徳の 水となる」と説かれている意味がよくわかりま す。	罪障功徳の 体は無二 不増不減
願海は二乗雑善の中・下の屍 骸を宿さず。 いかにいはんや人・天の虚仮・ 邪偽の善業、雑毒雑心の屍骸を 宿さんや。	本願の海には、下類の声聞や中類の縁覚の自 力雑行の善の死骸を宿しません。 まして人間や天人の偽善や、煩惱の毒のまじつ た自力心の死骸を宿すはありません。	不宿屍骸 (法)

転善

雑修 さまざまな行をまじえて修し純一でないこと。専修に対する語。

- ① 雑行を修すること
- ② 五正行の中の正定業(称名)と助業(読誦・観察・礼拝・讃嘆供養)を同格にみなして修すること。
- ③ 行は正行であっても、修する心が自力心である場合をいう。
- ④ 専ら念仏を修していても、そのことをもって現世の福利を祈る場合をいう。

雑毒の善

〔信文類〕『散善義』引文(『聖典全書』二卷71頁)(『註釈版』216頁)
〈一者至誠心〉。至とは真なり、誠とは実なり。

一切衆生の身口意業の所修の解行、かならず真実心のうちになしたまへるを須みんことを明かさんと欲ふ。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懷いて、貪瞋邪偽、奸詐百端にして悪性侵めがたし、事、蛇蝎に同じ。三業を起すといへども、名づけて雑毒の善とす、また虚仮の行と名づく、真実の業と名づけざるなり。もしかくのごとき安心起行をなすは、たとひ身心を苦励して日夜十二時に急に走め急に作して頭燃を灸ふがごとくするものは、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を回してかの仏の浄土に求生せんと欲するは、これかならず不可なり。

川水と海水

雑毒であつても善を行う者は少ないので川に譬え、悪人は多く、無明煩惱は深く広いので海に譬える。

転

万人を受けいれる

善人悪人という様々な味の水を引き受けて、一味平等の塩味と変え成す。

『正像末和讃』40首(『聖典全書』二巻488頁)(左訓 原文カナ)

(40)

弥陀智願の広海に

凡夫善悪の心水も

(文明本) 凡夫の善ころ悪の心を水に譬えたるなり

(顕智本) 善悪の心を水に譬えたるなり

帰入しぬればすなはちに

大悲心とぞ転ずなる

(文明本) 悪の心 善となるを転ずるなりといふなり

(顕智本) 様々の水の海に入りてすなわち塩となるが如く

善悪のころの水 皆大悲の心になるなり

消滅させることなく、無限に受けいれるが海の水は不増不減

『唯信鈔文意』(『聖典全書』二巻387頁)(『註釈版』701頁)

(康元本) 過去・今生・未来の一切の罪を転ず。転ずといふは、善とかへなすをいふなり。

(正嘉本) 過去・今生・未来の一切のつみを善に転じかへなすといふなり。転ずといふは、つみをけしうしなはずして善になす也。よろづの水大海にいればすなわちうしほとなるがごとし。

氷と水

氷は命を害する。水は命を潤す。

菩提の仏智(水)より見れば煩惱(氷)という実体は無い。あるのは功德のみ。

『高僧和讃』曇鸞讃

(32)

本願円頓一乗は

逆惡摂すと信知して

煩惱・菩提体無二と



信 行

すみやかにとくさとらしむ

(39)

無碍光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ

すなはち菩提のみづとなる

(40)

罪障功德の体となる

こほりとみづのごとくにて

こほりおほぎにみづおほし

さはりおほぎに徳おほし

(41)

名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば

功德のうしほに一味なり

(42)

尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば

智慧のうしほに一味なり

不宿死骸

悪人の死骸

同一鹹味

中下

上(菩薩)、中(縁覚)、下(声聞)と配当した

『十住毘婆沙論』易行品 十方十仏章 三乗行仏(『聖典全書』一卷411頁)

(『註釈版七祖篇』9頁)

その仏つねに声聞の行、辟支仏の行、もろもろの菩薩の行を説きたまふ。ある人はいく、「上・中・下の精進を説くがゆゑに、号して三乗行となす」と。

死骸

Q 善人まで死骸というのか？

A 自力では成仏できないから

『唯信鈔文意』(『聖典全書』二卷685頁)(『註釈版』700頁)

(康元本)しかれば大小の聖人・善悪の凡夫、みなともに自力の智慧をもつては大涅槃にいたることなければ、

(正嘉本)しかれば、大乘の聖人、小乗の聖人、善人・悪人・一切凡夫、みなともに自力の智慧をもては大涅槃にいたることなければ、

同一鹹味

とは善悪簡ばす一切衆生を引き受けていくことをあらわし、

・ 不宿屍骸

とは善人の自力根性を浄化し他力に転じていくことを明かす。

本願一乗海に帰入した者は自力のはからいを離れて他力を憑むものになるので、自力の者は存在しない。如来の本願力以外の不純物を宿さないのである。

ただし、高僧和讃第二首には悪人の死骸もいわれる。

善の不宿死骸

善をほこる心をうばわれる

悪の不宿死骸

悪を恐れる心をうばわれる

転前

自らの悪業と苦果に向き合っていない

転後

自らが悪業を引き受けてそこが仏道となる

阿闍世は阿鼻地獄へ行くことを受けいれて、

衆生の悪心を破壊しに行きます。無量劫の間衆生の苦悩を受けるが

苦とせず（『聖典全書』二卷119頁）

（この義、20220303峠雪安居にて 岡本法治さん新晃真さんから教わる）

一教二機対

一如より示現された本願は相対を示して衆生を利他教化する。それは衆生が縁を結ぶことのできる分別の領域に現れ出た平等一如の慈悲活動であった。具体的には言説たる教、因徳となる行信、果徳となる証が如来より示現されるのである。このことを指して『証文類』四法結釈には、

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。知るべしとなり。

という。相対を絶した阿弥陀如来の清浄願心より分別相対の領域に回向された因徳のことをここでは行信という。この行と信を指して『行文類』では教と機について比校対論する。

教 教は教法のことであり、念仏という法と諸善という法を比校対論

機 教法を信受している者を機といい、念仏の機と諸善の機を比校対論

無分別が分別の領域と接点を持つ

言葉の上では比校対論していてもその内容を見れば対目にならないものが含まれている。分別の次元と無分別の次元とが対目とされているからである。

教 思不思議対、因行果徳対

またその分別と無分別の接点をあらわして宗祖は行信一念を明かされる。行一念は分別領域の最小単位である一声に無上功徳が回向されることを指し、信の一念は時間という分別を持った衆生の上に、時間の経過を必要としない救済が成立することを明かしている。

機 奢促対

これらは対目しながらも相対を超えている表現と見なければならぬ。

法門構造を適示する比校対論

教 自力他力対、回不回向対

これらは善人だけに開かれる華天一乗と決別し、悪人をも含む万人を救済する教法を表している。善人がさとりを得ていく仏道と、阿弥陀仏が万人を救済する仏道との対比であるから、能動の主語が違う。

機 信疑対

すくいのお道が喚びかけられているのに他力の救済をはねつける、もしくは己の善根にすり替えて本願力回向を不回向の状態にしていることを疑という。如来選択本願力回向の救済に乘託することを信という。

絶対不二の教と機

『興福寺奏状』『摧邪輪』『延暦寺奏状』は「法然の専修念仏は過ちである」と攻撃してきた。その相手に対して宗祖は「いえ、あなた方も阿弥陀仏の法に包まれているのですよ」と答えたのが「絶対不二」の「誓願一仏乗」である。相対は優劣を示す。絶対不二はすべてを受けいれている。

(参考)

昭和47年度 聖道権実 判決

題意

宗祖は聖道門をもって方便の教とせられたが、方便とはいかなる意味か、単に所廢の法とせられる意図なのかどうか等を吟味して、宗祖の聖道教受容の態度を明らかにすることにある。

出拠

宗祖及び歴代相承の出拠

論点

- (一) 権・実の意味
- (二) 聖道門を方便と見られる理由と根拠
- (三) 宗祖における聖道教受容の態度
- (四) その現代的意義について

「聖道権実」判決

「化身土文類」通判一代の釈に

凡就一代教、於此界中入聖得果、名聖道門、云難行道。就此門中、有大小、漸頓、一乘二乘三乘、権実、顕密、豎出豎超。則是自力、利他教化地、方便権門之道路也

といい、『浄土和讃』(大経讃)に

聖道権仮の方便に、衆生ひさしくとどまりて諸有に流転の身とぞなる、悲願の一乗帰命せよとある。これをもつてこの論題の出拠とする。

さて今、これらの文によつて、宗祖が聖道門をもって方便とせられる意図を窺うのであるが、ここに聖道門というのは、宗祖自身、「此の界の中にして入聖得果するを聖道門と名く」といわれる如く、此土入聖の法門をいう。しかるにすでに「入聖得果」といわれる、方便といつても、聖道門をもって成佛法にあらずとされる意図ではない。このことは『愚禿鈔』に「聖道之実教」といい、あるいは、

一者豎超、即身是仏即身成仏等之証果也

とあるものなどに徴して、一層明らかである。しからば、それらの実教をも含めて聖道門全体を「方便権門之道路也」と仰せられる祖意はいずれにあるのであろうか。

思うに宗祖の聖道門観の基づくところは『大経』にある。『大経』には先ず「発起序」において、

如来以無蓋大悲、矜哀三界、所以出興於世、光闡道教、欲極群萌、恵以真実之利と、この経が釈尊出世の本懷なることを説かれる。而してこの発起序の文は自から終りの流通分の文に照応する。即ち「光闡道教」は「当来之世経道滅尽」に相応し、「恵以真実之利」は「特留此経止住百歳」の文に相応する。これによつて釈尊は、道教即ち聖道法を説くことを本意とせず、浄土の法を説くことを本意とせられることが明らかである。

この経意をうけられるのが、宗祖の『教行信証文類』であつて、『教文類』には真実教たる『大経』の大意を述べられるところに、釈尊出世の本懷の経であることを述べられる。また「化身

土文類」に

然拋正真教意、披古徳伝説、顕開聖道浄土真仮「云々」

といわれるのは、聖浄対望して真仮分判される理由を示されるので、次下に道綽の『安樂集』及び最澄の『末法灯明記』の文を引かれるのは、聖道法は末法の劣機には難証の法であることを述べられるのである。次上の文に

信知、聖道諸教、為在世正法、而全非像末法滅之時機、已失時乖機也

とあるのが、正しくその意である。しかるに佛の大悲は一切衆生を平等に救うことにあるのであるから、聖道法を説くことは釈尊の本意でなく、三時通入の浄土の法を説くことこそ、釈尊の本意とせなければならぬ。しかもあえて聖道法を説かれるのは、未熟の根機をして浄土の法に誘引せんがために外ならない。すなわち今、権実というのは、佛の説意に約していうので、聖道法は随他意方便の説であり、したがって所廢の法と見られたのが、宗祖の思召しであると窺われる。

以上

平成28年度 聖道権実 判決

提要

〔題意〕

宗祖は聖道門に実教と権教があることを認めながらも、一方では聖道門をすべて権教として廃捨された意図を明らかにする。

〔出拠〕

『愚禿鈔』、「浄土和讃」大経讃

その他の出拠については必要に応じて挙げる。

〔釈名〕

〔聖道〕

〔権〕

〔実〕

〔義相〕

一、宗祖における聖道実教と聖道権教の説示

二、聖道法を実教とみる説の内容

三、聖道法を権教とみる説の内容

四、宗祖における聖道法の意義

「聖道権実」判決

【題意】

宗祖は聖道門に実教と権教があることを認めながらも、一方では聖道門をすべて権教として廃捨されている。その意図を明らかにする。

【出拠】

『本典』「行文類」「化身土文類」

『愚禿鈔』

『浄土和讃』等

【釈名】

「聖道」とは聖道門のことであり、自力の修行によって、この世でさとりを開くことを説く法門をいう。

「權」とは權教の意で、仏が暫く実義をさしおいて仮りに設けた方便の教えをいう。「実」とは実教の意で、究竟の実義のありのままを明白に示した真実の教えをいう。

【義相】

一、宗祖における聖道実教と聖道權教の説示

聖道法を実教と見る説示は、『愚禿鈔』卷上の二双四重判で、頓教の中に二教二超が出されている。二教は教法そのものを指し、二超は所得の証果を示している。その中、豎超は聖道の実教を指し、「難行聖道の実教」、つまり自力聖道門中の頓教として「仏心・真言・法華・華嚴の教」を挙げ、所得の証果として「即身是仏・即身成仏等の証果」を得ると示されている。

次に聖道法を權教と見る説示は、「化身土文類」觀經隱顯釈において、此土入聖の聖道門を「自力、利他教化地、方便權門の道路」と示されるものや、『浄土和讃』の「聖道權仮の方便に衆生ひさしくとどまりて 諸有に流轉の身とぞなる 悲願の一乗歸命せよ」などである。

二、聖道法を実教とみる説の内容

宗祖は聖道法を權教と説示するが、權教とは暫くは用いられるが、最終的には廃される暫用還廢の教法の意味である。すなわち、聖道法は、真実なる弘願法に入る過程としてしばらくは用いられるが、弘願法に入りおわたたならば不要なものとして廃されるものと位置づけられる。その場合、聖道法そのものは成仏法であるが、末法時の凡夫には堪えられないから廃されるとするのが、聖道法を実教とみる説の内容であり、これを約機廢立という。

聖道法そのものが成仏法であるとされるのは、『大經』には法藏因位の行として聖道法の行である六波羅蜜が説かれ、『一念多念文意』に「豎の金剛心の菩薩」、「聖道自力の難行道の人」とされる弥勒の成仏が、「信文類」便同弥勒釈に「竜華三会の曉、まさに無上覺位を極むべし」と示されること等に拠る。

三、聖道法を權教とみる説の内容

聖道法を權教と見る説の内容は、聖道法そのものごとく成仏法ではなく、弘願真実に導くためにのみ仮に設けられた法であるから廃されるというものであり、これを約法廢立という。

通仏教において權実は得道できるか否かによって区別するが、宗祖においては「行文類」一乗海釈に「大乘は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乘なり。ただこれ誓願一仏乘なり」と、弘願法のみが一乗真実であると示されること等に拠って權実を分別する。

四、宗祖における聖道法の意義

仏教における法とは転迷開悟の法であり、衆生に受容され、それによって衆生が成仏してゆく法である。すなわち、機を離れた法はなく、法を離れた機はない。法は素晴らしいが機が堪え得ないといわれる時があるが、機に堪え得ない法、機を利益しない法が素晴らしい法であるはずがない。末法時の凡夫という機に堪え得ない法であるから廃するというのは、廃する理由を機に置く約機廢立であるが、末法時の凡夫にとって成仏不可能な法であるから廃するというのは、廃する理由を法に置く約法廢立と考えるべきである。その意味で約機廢立がそのまま約法廢立となる。宗祖は「化身土文類」において、聖道門を「方便權門の道路」と示されるが、その直前には、

しかるに常没の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆゑに。散心行じがたし、魔悪修善のゆゑに。ここをもつて立相住心なほ成じがたきがゆゑに、「たとひ千年の寿を尽すとも、法眼いまだかつて開けず」といへり。いかにいはんや、無相離念まことに獲がたし。

と、聖道法の行は機に堪え得ない行であることが明かされている。宗祖においては、聖道法がもともと仏果を証することが不可能であるから権とされるのではなく、機に堪え得ないから権とされるのである。

宗祖がこのように権実を分かつのは、得道できるか否かによるのではなく、仏意があるか否かによっている。すなわち、『大経』が真実の教とされるのは、『大経』が釈尊出世本懷の経であるからである。それは、『大経』こそが本願を顕露に説かれた経であるからであり、『尊号真像銘文』や『一念多念文意』には本願を説くことは釈尊のみの出世の本懷ではなく、一切諸仏の出世本懷であると説示されている。菩薩の総願である四弘誓願の第一は、「衆生無辺誓願度」であり、そもそも一切の菩薩の根本の願いは一切衆生を迷いから悟りへ度することにあるとみられる。とすると、どのような機根にも相応するという立場からいえば、仏道を歩む能力の優劣にかかわらず仏果を証することが可能な弘願法こそが一切の諸仏の願に應えるものであるのは理の当然である。宗祖が『大経』を真実の教とするのは、このように考えられたからであろう。聖道法の教理は深妙であるが、一切衆生を利益するものではなく、一切衆生を成仏せしめるのは弘願法のみであるという宗祖の見方は、便同弥勒釈の直前に、

至れること、『華嚴』の極唱、『法華』の妙談にしかんや。かつはいまだ普授あることを見ず。衆生一生にみな阿耨多羅三藐三菩提の記を得ることは、まことにいふところの不可思議功德の利なり

との文が引用されるところにもあらわれている。

聖道法は暫用還廢の権教とされるが、その暫用の側面について、『末灯鈔』第一通には、「聖道といふは、すでに仏に成りたまへる人の、われらがところをすすめんがために」説かれた教えであるとされる。また、「化身土文類」では聖道門が「自力、利他教化地、方便権門の道路なり」といわれるが、「利他教化地」の語は還相を示すものであり、聖道法は還相の菩薩が衆生を弘願法に入らせるために説く法であるとの位置づけとみることできる。

なお、「化身土文類」三願転入の文において、宗祖は自らの宗教的歷程を顧みて、聖道法を棄てた後、要門・真門を経て弘願に転入したと述べている。聖道法は廢されたものではあるが、最終的に自らを弘願に転入させたはたらきを持ったものと位置づけ、宗祖は釈尊によって聖道法が説かれたことを深い謝念をもって受容されていたと考えられる。

【結び】

宗祖が聖道法を権教とされるのは、聖道法そのものが不成仏法であるからではない。仏の本意は聖道法を説くことにはなく、最終的に弘願法に入らせるところにあるとみられたからである。我々は、聖道法に依るべきではないが、聖道法を一切衆生救済という仏の大慈悲のあらわれとして受け取るべきである。

以上

資料提供 井上敬信さま

..... Ⅱ 案内 拙論「絶対積の考察」

『行信学報』2012（平成二十四）年
<http://kyokusho.g.dgdg.jp/benkyo/zettai.pdf>

以上。何かお気づきの点がありましたらお知らせ下さい。

〒五九九―八一二五
大阪府堺市東区西野521 旭照寺
山上正尊
senjakuhongan@gmail.com